

# 「何に学ぶか？」

～安定パート2～

ヘブル人への手紙 12:1～3、13:6～9、11:32～40

私たちは、人生を安定させるために経験に基づいて行動しています。例えば、自分で経験した事がなく初めてのことは、言葉で…耳で聞いただけ、見ただけでは、安全確実に実行することはできません。ですが無意識のうちに、私たちは、それを他人にさせようとするのです。自分は一度経験していることであれば出来るかもしれません。しかし他人がその行為が初めてだったでしょう。とくに子どもたちにやってしまいがちです。「危ないから包丁は使ってはダメ」「危ないから行ってはダメ」「やってはダメ」とやらせないで「～やったらできるんだよ。なんでできないんだ!」とできなかったことに対して指摘します。子どもに対してに限りませんが、このようなことはありませんか? だれでも最初も失敗をします。しかしそこから自分で注意力を得て学ぶのです。私たちは過去の経験に基づいて自分が正しいと思ったことを他人に押しつけているのです。これは、最大の癌です。何に学ぶのか? 自分の価値観を他人に押しつけるのはやめましょう。それが正しいかどうかは私たちには分かりません。聖書に放蕩息子の記事があります(ルカ15章)。息子(弟)は、父親に生前分与で財産の半分を分けてくれと申し出、それを持って家を出ます。放蕩した結果、全てを失って、悔い改めて父親のもとに帰ってきます。父親は、死んだと思っていた息子が帰ってきたと祝宴をひらきます。一方、父のそばから離れず真面目に働き続けたもうひとりの息子(兄)は、遊興三昧で自業自得な弟が許せず、その祝宴の場に行こうとしません。ふてくされたのです。私たちに同じようなことがないでしょうか。要は、このもうひとりの息子(兄)も弟のようにしたかったのです。私たちの心にはいつも「本当は〇〇なんだけど××な理由でできなかった」という記憶が残ります。その思いが次の世代に間違っって伝わってしまうのです。過剰になってしまったり、無関心で完全放置になったりします。自分はどういう行動をとっていますか。

## ■ ①己の悟りに注意! 過去。たくさんの経験と共有

私たちにとって危険なことはなんなのか。聖書には己の悟りに注意しろ、過去に気をつけなさい、沢山の経験を共有しなさいと書かれています。哲学者のプラトンは、経験を想起と言いました。プラトンは、さらにギリシャ語でアナムネシスと呼んで、過去に経験した物事以外に、神秘的神の表現、真理認識に至る過程としていました。人間同士の経験だけでなく、神との経験に基づいて得られるものが経験であり想起であると述べたのです。しかし次第に、この神との経験がなくなって、人間がこの豊かな物質の中で経験したことが経験になってしまったのです。いわゆる「教への風」です。人間の脳は、人から聞いたことを、あたかも自分が経験したかのように思えるようになっていきます。神さまは、私たちに「共感」するから与えてくださっています。しかし、プラトンの述べている想起と経験、共感がズレると私たちは物事の判断を誤ってしまいます。では、神さまがいる想起とそうでない想起の違いは何でしょう。私たちは、いろいろと神さまがいない経験をします。神さまは、その経験に神さまの経験を加えたいと考えています。私たちは、教会に来て、思い出したくもない過去を掘り下げていきます。この過去は、神さま不在の経験だからです。そして、私たちが経験したことはちゃんと解決されないまま記憶に残っています。これは非常に危険です。解決されない記憶のまま人と向き合うからです。そうすると議論で人を抑えようとしてしまいます。自分の解決されていない経験を通して良い・悪いの判断をして、他人に押しつけてしまうのです。そして言わなければならない人に「ごめんなさい」が言えません。その行為は特に親しい人に出ます。私たちもそのようにして育ってきました。私たちは、その間違っった価値観から解放されなければいけません。だから私たちがしなければいけないのは、己の悟りに頼らないことです。そして自分がしていること、してしまっったことを「悪」なんだということを受け取ることが大切。しかしそれは決して自分を責めるものではありません。私たちが頼るべきものは聖書です。ヘブル人への手紙12:1の始まりは「こういうわけで」とあります。「こういう」とあるのは、私たちがお手本として歩めるように聖書には先人の経験が書かれているからです(ヘブル11:32～40)。ヘブル11章の書き出しは「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです」。聖書に書かれている先人たちは、この書き出しにある信仰をもって生きていました。いつも脅かされ、痛みの中を通った人たちです。しかし最後は必ず抜け出しています。ダビデは「苦しみにあったことは私にとっ

て幸せでした。私はそれであなたのおきてを学びました。(詩篇119:71)」と言っています。パウロも「そればかりではなく、患難さえも喜んでます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。(ローマ5:3・4)」と言っています。目の前に起る問題を恐れてはいけません。聖書は私たちに責めているわけではありません。私たちの過去に経験したものが悪である、間違っていると教えてくれているのです。この間違いに気がついて素直に「ごめんなさい」と悔い改めると、あとは楽です。しかし、そうさせないものが過去の経験や記憶です。「責められた」「やられた」と思わせて、悔い改めて前進させないのです。しかし私たちは、イエスキリストの十字架の贖い、喜び、素晴らしさを知っています。これらのことを知らない旧約時代の先人も前述したことを行っったのです。ですから、己の悟りや過去に頼らないで、信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいきましょう。

## ■ ②人の言葉に注意

聖書の外典に「ペテロ行伝」があります。その中で、ペテロは迫害が激化しているローマから殺されることを恐れて逃げようとしていた時、アッピア街道の向こうからイエスキリストが向かってこられるのを目にします。「主よ、どこに行かれるのですか?(Quo vadis Domine?)」と尋ねるとイエスキリストは「もう一度十字架にかけられるためにローマに行くのです」と答えられて主の幻は消えます。ペテロは深く恥じ入り悔い改めて、引き返して、最後は逆さ十字架刑で殉教するのです。私たちに、分かっているけど逃げてしまうペテロのような弱さがあります。でも神さまは、そんな私たちを叱ったり責めたりはしません。自らがその道を進む姿を見せてくださるのです。私たちは、このイエスキリストの姿から学ばなければいけません。そして教会で自分のことを見つめ考えなければいけません。世の中の神さまを知らない人たはどのように考えることをしないので被害者意識で、いろいろなところで間違っった言葉を発します。自分は悪くないという自己義が生じてしまうのです。私たちは、その自己義をとらなくてはなりません。だから、この自己義を生じさせる人の言葉に注意しましょう。

## ■ ③感情衝動に注意。すべてを失う。

自己義になった時にとる行動は、感情的な行動です。自分さえよければ…と思っている人の行動は感情的衝動にかられたものです。昔のお父さんがやっていた「ちゃぶ台返し」のようなもので、すべてを失う、なんの意味もない行為です。私たちは後悔しないようにしなければいけません。私たちの人格は神様から与えられたものです。しかし価値観は人から与えられました。この価値観を愛に根ざした価値観に変えていくことが大切です。私たちは神様に愛されています。「愛されていない」という価値観を捨て去り、神様に「愛されている」ことを受け取りましょう。愛に根ざした価値観を得ることができれば、感情的衝動を起しそうなき、その価値観によって衝動を抑えることができます。

## 最後に

私たちが、安定した生活を送るためにやらなければいけないことは単純です。「己の悟りに頼らない・人の言葉に右往左往しない、人の言葉に注意する・感情的衝動で動かない」です。私たちは、これらをすぐにやってしまいます。そして、良いものまで壊してしまうのです。そしてその壊してしまう最大の良いものはイエスキリストの犠牲です。これが私たちにとって一番もったいないことです。私たちの人生のために命までかけてくださった方はイエスキリストだけです。私たちが間違っった道を歩まないように、先に何も言わずに歩んでくださったのもイエスキリストだけです。こんな私たちのために、十字架の上で語られた言葉は「かれらの罪を赦してください。彼らは何をしているのか分からないのです」でした。つまり、私たちが正しく歩めるように私がそれを背負うと言っったのです。だから、私たちは本当の自分に戻り、隣の人に良いものを流し続けなければいけないのです。神さまは、私たちの壊れた部分の回復を望まれています。イエスキリストの思いを知り、イエスキリストの愛を受け取り、この愛に根ざした価値観をもっていきましょう。

(要約者:行司 佳世)

(9月11日)